

平成27年度文学研究科博士論文要旨

台湾における観光旅行事業史1920～70年代

——日本統治時代・国民党時代の政策と関連させて——

文学研究科歴史学専攻 吳 米 淑

1) 本論文の特色

本論文は、学術論文4本(内、レフリー付き2本)、研究ノート1本(レフリー付き1本)、学会・研究会発表7回(内、国際学会1回、全国学会2回、地方学会・研究会4回)、及び現在、投稿審査中の論文1本、投稿中論文(レフリーなし)1本を基礎に、さらにそれらに考察、加筆・削除、修正、分析を加え、作成したものである。

現在、台湾観光は極めて盛んであるが、本論文はそれを学問的、歴史学的に考察、分析、位置づけようとした。日本植民地時代の1920年代における日本人、台湾人の相互の観光旅行、もしくは視察旅行を双方から構造的、かつ実証的な分析を加えた。その結果、観光旅行は日本の台湾植民地政策の一環をなし、インフラ整備、資源開発と密接な関係にあることを解明した。また、従来、研究が皆無であった日本軍人の台湾観光に焦点を当てたこと、日本敗戦後、蒋介石・国民政府が観光政策を重視していたことに光を当てたことも本論文のオリジナリティと言えるであろう。さらに戦後の日台人的・経済交流を歴史的に解明した。このように、単なる観光旅行史にとどまらず、植民地台湾時代の人的(軍人を包括)、あるいは物的(台湾の樟脳などの資源を含む)交流などに視野を広げ、歴史的背景を押さえ、考察を加えた。ただし論理展開、史料分析は今後、さらに強化する必要があることは言うまでもない。

2) 本論文の構成と各章の概要

本論文は序章、第1章～第6章、終章、及び付録、史料・参考文献で構成されている。なお、本論文は156ページ(400字詰め約400枚)である。構成は以下の通り。

序章 (先行研究と問題の所在、各章内容の説明)

第1章 日本人の台湾旅行・視察—1920・30年代—

第2章 台湾人の日本旅行・視察—1920・30年代—

第3章 政府機関と民間団体の観光政策—日中戦争期—

第4章 台湾観光事業と日本軍—日中戦争期—

第5章 政治激動下の台湾観光実態とその推移—

1940年～50年代—

第6章 台湾経済成長期における観光旅行政策—

1960・70年代—

終章

付録「1920～70年代の台湾観光史大事記」

史料・参考文献

各章の概要は以下の通り。

第1章は、日本人の視点から、1920年代から37年まで台湾の観光事業の変遷を論じる。それは、物資運輸や市場開発と連動し、植民地経営の一環であったと論じた。

第2章は、第1章と同時期、台湾人の日本観光旅行の実態と特徴を論じる。台湾人の商人、修学旅行、原住民に日本旅行をさせたことは、近代化した日本の優位性を実感させ、植民地経営を円滑にする上で重要な影響を及ぼした。

第3章は、日中戦争の勃発後、「観光報国」政策に即して日本人の台湾観光がどのように推進されたかを解明した。このことから日本の南進政策と密接な関連を有していたことがわかる。また、台湾原住民を旅行させることで、戦時認識の徹底化を図った。

第4章は、台湾における観光旅行政策と日本軍との関連を考察している。休暇の時、日本兵士が台北の観光スポットを見学する自由が与えられ、これによって休息させ、日本軍の戦意の維持、高揚を図った。

第5章は、観光空白期と見なされてきた日本敗戦、国民政府軍の接収という1945年から50年代の観光政策を歴史開拓的に論じる。これによって戦後台湾の観光事業の転換と発展をアメリカによる援助金と絡めて考察する。この段階で日本統治期に否定された中華文化や原住民文化が復活したと論じた。

第6章は、1960年代に入ると、アメリカの援助金は漸減したが、その結果、台湾の経済自立化が図られ、観光事業政策が経済改善の一環とされた。外国人や華僑に対して「自由中国」や「反共復国」を宣伝、観光誘致を

積極的に勧誘することで支持を獲得、外貨保有も増大した。この結果、台湾の財政問題、観光設備改善に役立つと論じる。

終章は結論に当たり、日本統治期、その植民地政策に伴い発展した。日中戦争勃発後、観光政策は国防宣伝と結びつけられ、日本化が強化され、台湾の伝統は否定された。1945年国民党政権が復権すると、逆に日本化は徹底的に否定された。この双方に問題があり、現在、台

湾の観光政策はその双方の長所を採り入れることで、アメリカ支援を含めて、台湾の経済、観光事業にとって健全に動き出したという結論を導き出した。いわば中華文化、原住民文化、及び当初国民党政権下で否定されてきた日本文化遺産も観光面で復活し、台湾観光を豊富にしたと結論づけた。

なお、本稿末尾の「1920～70年代の台湾観光史大事記」は独自に作成したもので、参考になる。

ウィリアム・ゴールドディング研究

——悪の視点から——

文学研究科英語圏文化専攻 高橋 公雄

本論文執筆の目的は、ウィリアム・ゴールドディング (William Golding) の作品を悪の視点から読み解こうとするものである。ここで善・悪を考察する際に、筆者が抛りどころとする二つの規範について述べておきたい。

第一に、アウグスチヌスの言葉「意志がより高いものを見捨て、より低いものに向きを変えるとき、意志は悪になる一意志が向きを変えて見ているものが悪だからではなく、向きを変えること自体が倒錯だからである」である。もう一つの規範は、これはエーリッヒ・フロムからの引用であるが、「人間の本质とか本性とかは、善とか悪のように特定の《実体 substance》ではなくて、人間存在の条件そのものに根ざす《矛盾 contradiction》である」である。

人間の本质が善でも悪でもなく、新しい解決を要求する矛盾にあるとすれば、人間はそれが消極的であれ積極的であれ何等かの解決を提示しなければならない。その際の意志の方向が悪とそうではないものとを分けるのである。また悪は極めて人間的な現象であることも確認しておきたい。

筆者はこのような観点から、ウィリアム・ゴールドディングの作品に表現されている悪を検討してみようと考えた。

本論文は三部から成る。第一部では『蠅の王 (Lord of the Flies)』、『後継者たち (The Inheritors)』、『ピンチャー・マーティン (Pincher Martin)』、『自由落下 (Free Fall)』の四作品を論ずる。これらの作品では悪の問題が比較的単線的に、直截に扱われている。

第二部では『尖塔 (The Spire)』、『ピラミッド (The Pyramid)』、『可視の闇 (Darkness Visible)』の三作品を論ずる。これらの作品では重層的、複合的に悪の問題が扱われるようになっている。

第三部では『通過儀礼 (Rites of Passage)』と『この世の果てまで (To the End of the Earth: A Sea Trilogy)』を論ずる。『この世の果てまで』は晩年の海洋三部作、『通過儀礼』、『接近戦 (Close Quarters)』、『この世の炎 (Fire Down Below)』を合本したものである。これらの作品においては、悪の問題は背景に潜んで目立たなくなっているが、やはり厳として存在している。

第一部、第一章の『蠅の王』がゴールドディングの第二次世界大戦の直接体験から出ていることは明らかである。さらに付け加えれば、グラマー・スクールでの教職経験であろう。

核戦争を避けるために英国の少年たちは輸送機に乗って太平洋に向かうのだが、敵機の攻撃にあって南方の孤島に不時着する。物語はこの子供たちの一団がどのように振る舞うかを丹念にたどっている。一見楽園を想起させる子供たちが居住する孤島の反対側には、大洋の荒波が轟き、子供たちが抛って立つ場所がいかにかういものであるかを示唆する。この海はリバイアサンと表され、棒に突き刺し地面に立てられた豚の首とともに少年たちの内に潜む悪の表象となる。

聖歌隊がハンター・グループに姿を変え、顔を迷彩色で塗るようになるにつれて、文明の抑制というたがが少しずつ外れていく。ほんの「遊び」のつもりが、次第に本物の「人狩り (殺人)」へと逸脱していくのである。

今にも凄惨な結末をむかえようとしているその時に、まるで「機械仕掛けの神」のように、イギリスの海軍士官 (大人) が現われて事態は急転直下解決する。しかし、海軍士官もハンターに変わった少年達と何ら違わないということ忘れてはならない。彼らもまた、さきほどまで子供たちがやっていたことを、より大規模にかつ徹底して行っているのだ。しかも、彼ら自身そのことを知ることがないという苦いアイロニーが含まれる。

第二章『後継者たち』においては、ネアンデルタール人の黄金の黄昏と滅亡、人類の台頭が、一人の原人の意識を通して描かれている。言語未発達なネアンデルタール人の意識をいかに文章に定着させるか、これはゴールドディングの特に注意を払ったものの一つであった。

我々は論理的思考以前の状態にとどまっていたであろう旧人類の感覚知覚になじみながら、彼らの経験を解釈・分析すると同時に、彼らの無垢がいかなる性質のものであるかを知り、また我々の祖先であるホモ・サピエンスの本质も覗き見ることになる。終章で一人の人間が、後にしてきた暗い森での恐怖の体験 (ネアンデルタール人との邂逅) を回想するが、これは冒頭のエピグラフへの痛烈なアイロニーになっている。

第三章『ピンチャー・マーティン』においては人間一般ではなく、一個人の墮落に焦点が絞られた。ゴールドディングは主人公ピンチャー・マーティンの悪のあり様を徹底して描いている。最終部で明かされるどんでん返しのような事実は衝撃的である。この小説の冒頭部で主人公は死に、あとは彼の煉獄での苦闘であるとされるのである。

この苦闘と並行して、作品に断片的に挿入され描き込まれているのが、snapshotあるいはtrailers of old filmsと称される、いわゆるフラッシュバックの手法である。我々読者はこれらの断片的な映像をたよりに主人公の過去を覗き込み、それらの一つ一つ拾い集めて、ピンチャー・マーティンという男の過去にまとめあげなければならない。

そこで浮かび上がった彼の人生に対する構え、また人物像は何のためにあるかと言えば、それらによって主人公を判断するためにある。彼は自分のエゴの消滅を断固拒否し、天に向かって罵る人間である。自分自身で世界を創造してしまう人間である。しかし、その英雄的とも思われる断固たる拒絶の姿勢に対して、彼の創造する世界は何と貧相で惨めな世界であろうか。この小説の眼目はむしろそれを暴露することにある。そして、そのようなピンチャー・マーティンにどのような判断を下すかは読者に委ねられている。

『ピンチャー・マーティン』がピンチャーのBeing、つまり主人公の悪の状態を描いているのに対し、第四章『自由落下』はサミュエル・マウントジョイのBecomingつまり主人公が何時、何処で、どのような理由から、どのようにして自分の自由な意志を行使し、逆に悪に囚われ自由を失ったかを求める過程を記したものである。

サミイは何を犠牲にしてもピアトリスを我が物にしたいと決意した。彼はその時、悪への自由を行使し、以後の「自由な転落」の道を辿ったのである。サミイの「自由な転落」を支えたのは彼の倫理相対主義であった。これはニック・シェイルズの合理的世界観から引き出されたものである。相対的倫理は、彼をつき動かしているあらゆる残酷さや動物的欲情を合理化できるようにした。それは自己を満足させる行為を、次第に習慣的な日常行為にまで押し広めることを許した。ピアトリスを奪い、捨てることを許した。なんとといっても、心すべきはこのエゴという君主の平和と快楽だけなのであった。

さらに、戦争に伴う破壊を彼はむしろ歓迎した。人の心にも、世界全体にも無秩序があった。破壊や恐怖や死をこの世の型として受けとめれば、一人の人間の行為などは取るに足らない病気のようなものに過ぎなかったの

である。

自分のこのような悪に囚われている姿を認識できるようになったのは、ドイツ軍の捕虜収容所におけるハルデ博士の訊問によってであった。回心を経験したサミイが悟った世界の核心を成す実体は、実は政治や科学によって用無しにされ、すでに冗談になっていたもの、「個々の人間の個々の人間に対する関係」であった。

彼は自分の「因果律による生の無責任さ」の結果をまざまざと見せつけられることになる。それは精神病院に収容されている、気の狂ったピアトリスの無惨な姿であった。

『自由落下』はゴールドディングが作品の中で悪の問題を取り扱うその扱い方において、転回点となる作品である。ここでは自由と悪という問題のほかに、それと関連づけて「宗教」や「科学（テクノロジー）」が問題になっている。この作品以降、前の三作のように、悪が単独で扱われることはなくなり、常に他の何かとの複合という形態を取るようになる。悪がそれだけ多岐にわたって見分け難く浸透しているとも言えるのである。

第二部、第五章『尖塔』においては、「この世に無垢な仕事は在り得るのか」という疑問に対して一つの解答を提示している。ゴールドディングは、歴史の中のある挿話—ジョスリンという名の助祭が、自分の信仰心を形として現わすため、狂気とも思われる宗教的情熱を傾けて、自分の生命をも顧みず、さまざまな障害や苦難と戦い、奇跡としか表現しようのない大尖塔を建立したという物語—を捉え、その「宗教的情熱」の内実を探り、暴いてみせた。

ジョスリンを支えたものは、「神我を選びたもうた」、この一言に尽きる。「私は尖塔を建立するために選ばれた者である」。彼の天真爛漫な愚直さは、彼の無知からきている。この無知はまた無垢に通ずる。人はこの企てに賛同し、肩を貸すべきである、と彼は信ずる。

しかし、問題は彼が宗教的情熱に溺れて、自分がいかなる人間であるかを忘れてしまうことにある。自分の無知を忘れ、自分の傲慢を忘れるのである。このひたむきさは、しかし、諸刃の刃の様相を帯びる。旧約聖書に登場する四人、ノアもヨブもホセアもアブラハムも、すべてはひたむきに信じ、行った者達ではなかつただろうか。

このような二律背反的構造はこの作品の基調である。「尖塔は上に伸びるのと同じくらいに、下にも伸びてゆく」ものであった。ジョスリンの「尖塔」が空に伸びてゆくということは、彼の「地下の穴蔵」もまたその領域を広め、深めていくということなのだ。パンガル、グッ

ディ、ロジャー、レイチェルはいわばその尖塔建設の犠牲になったのである。

尖塔が完成間近になったとき、彼は叔母のアリスンに会った。彼の尖塔建設のために資金を提供したのは彼女であるが、それは大祭壇の脇に自分の墓所を確保する下心があつてのことである。あなたの体はこの教会を汚す、という彼の傍若無人な言葉に叔母は立腹し、意外な事実を明かすのである。国王に身を売った忌むしい叔母のおかげで息子が昇進できたことを。パンガルもグッディも、さらにロジャーもレイチェルも、そのままであれば、生きることの意味を持たせ得ていたかもしれない。ジョスリンの「宗教的情熱」が、これらすべてを犠牲にして尖塔を建立させたのである。彼は絶望に打ちひしがれる。

ジョスリンの尖塔は焦がれた女性に対して勃起した男根として見える。彼が識閥の下に保っていたグッディに対する欲望の代償作用、a self-erection for self-fulfillment これがすべてなのであった。しかし、尖塔はやはり美しいものとしても映るのである。それは依然として、グッディへの愛も含めた、愛の表現でもある。それを感じとった瞬間、彼の絶望は覆される。尖塔の呼び起こした絶望のビジョンも、また歓喜のビジョンも、いずれも十分真実を表わしていない。それは、物事に性急な判断を下さず、どちらつかずの状態に耐える、ということのもう一つの実例になるであろう。

この小説の最後で、神父はジョスリンのいまわの際の唇の震えを‘God! God! God!’と解して、死者の舌に聖体を置く。これによって、ジョスリンの信仰の物語は歴史の中に組み入れられるとともに、はしなくも信仰の偉大さという美名に塗り込められることになったのであった。

第六章の『ピラミッド』は三つのエピソードがゆるやかに繋がって成っている。ゴールドディングはそれをソナタ形式に例えた。つまり、主題提示部があり、その主題に沿った幕間狂言風の展開部があり、その主題の再現と終結部があるというわけである。織りなされる第一主題は社会階級（あるいは舞台となる社会のイデオロギー）、第二主題は歪んだ人間性から生ずる歪められた愛ということになる。

舞台は英国の田舎町 Stilbourne に設定され、小説の中を流れる時間は1920年代から、第二次世界大戦を経て、1960年代に到るまでである。この作品は一見して教養小説と目されかねないが、よく見ると似て非なるものであることが分かるだろう。それならば、これは30年代から60年代にかけての地方生活を描いた風俗小説なのであろうか。それもまた否である。むしろ、それらの描

写を通じて浮かび上がってくる「経験とは何か」、「生きることとはどのようなことか」等の実感が問題になる。

第七章『可視の闇』も三部からなる。第一部 MATTY においては、個々のエピソードは鮮明に記されているにもかかわらず、マティその人の一貫した人格は希薄である。マティは空襲の劫火から救い出されたというよりも、むしろそこから生まれ出てきたかのように描写されている。畢竟、彼を寓意的な人物と取らざるを得なくなる。マティの寓意性、抽象性の故にさまざまな意味が重層的に重ねられる。

第二部 SOPHY においては、双子の姉妹ソフィーとトニーの悪への指向と傾斜が、背景となる状況とともに、詳細に描写されている。その悪への動きはエントロピー（熱力学第二法則）と同様に虚無（エネルギー・ゼロ）へ向かうがごとくである。

第三部 ONE IS ONE においては、マティと双子姉妹、特にソフィーがテロリズム（子供誘拐）をめぐる交差するのだが、それをグッドチャイルドはどう見るのかという問題になる。ゴールドディングは最極端の人間としての存在を描いた。それらがマティであり、ソフィーである。マティは精神性の極北、ソフィーは悪の極北である。いずれも読者には理解しがたい存在であるが、凡人であるグッドチャイルド（インテリではあるのだが）やエドウィンの理解を通してそれらの存在を理解する手がかりを得ることができる。

最終部で、マティが美しく輝く少年になってペディグリーを迎えに来るといふ印象的なシーンがあるが、そこに地獄の劫火に満ちたこの世界に「枯れた骨が生き返る幻」を幻視し、ここに「息吹」を吹き込もうとする作者の意志を感じる。

第三部、第八章『通過儀礼』はイギリス青年の英国本土からオーストラリアへの航海記という形をとった小説である。この間に船に乗り合わせた牧師の死の顛末を描いている。

エドモンド・トールボットという野心に満ちた若者は、そのパトロンである名付け親の貴族某の推輓によってかの地の総督付秘書官という役職を得て赴任する途上である。私たち読者は彼を通してこの航海（1812年頃）を経験する、いわゆるトールボット体験を味わうことになる。貴族某の言葉「おまえを通して再び人生を生きたい」は私たち読者の言葉でもある。

また、彼がガンマ（Γ）の章に挿入した、牧師コリーの妹に宛てた手紙を読むことで、私たち読者は所謂コリー体験をすることにもなる。さらにまた、手紙を読んだトールボットがその後どのように変わっていくのかを観

察しつつ、貴族某の選んだ、すなわち私たちの選んだ前途有為の若者に対する人間的評価をしていく。このような工夫によって、私たち読者をトルボットの航海に深く参入させるという語りの構造になっている。

第九章『この世の果てまで』はゴールディングの晩年の作品『通過儀礼』、『接近戦』、『この世の火』が後に合本され、出版されたものであるが、この海洋三部作は主人公トルボットの人間的成長をめぐる物語であるといってもよいだろう。確かに主人公トルボットは人間的成長を遂げる。それは彼の人物評価の変化に、言葉に対する意識の深化にその一端をうかがうことができる。

しかし、この三部作をトルボットの一種の「教養小説」としてすませられないものがある。つまり、そのようなジャンルに納まりきれない、多重的な作品であると

いうことである。この論考では、ハッピーエンドで終わってしかるべき作品が、なぜ「物悲しい」結末になっているのかを、三部作におけるトルボットと他の登場人物との関わりを通して考察している。

結論として、悪の描写の推移と各作品の終結部を関連付けて考えることによって、ゴールディングの作品がいわゆる「教養小説」とは似て非なるものである所以を述べる。とりわけ、gimmickと呼ばれた終結部のパースペクティブ転換の技法が各作品に及ぼす影響を検討し、それらの推移をたどることによって、作品の奥行きが増していることを論じた。さらに、作家自身の内面に潜在した合理的精神と倫理性ないしはロマン的精神との葛藤がその作品においてどのような結果を招来したのかを考察した。

インドネシア語・日本語ビジネス電子メールについて

——「敬称」「前文」「主文」「末文」の研究——

文学研究科日本文化専攻 MIFTACHUL AMRI

(1) 論文の構成

本論文は、本文、注、参考文献を含め、125頁からなり、巻末に Excel で整理した「インドネシア語と日本語ビジネス電子メール一覧」をデータとして付している。本論文の構成は、以下の通りである。

序章	本研究の目的
第一章	インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「敬称」の使用状況 『イ・日メールの「敬称」の使用数と使用率』一覧 『イ・日メールの「宛名における敬称の用法」と「本文の敬称の用法」』一覧
第二章	インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「前文」の出だし表現 『イ・日メールの「前文」出だし表現の結果』一覧
第三章	インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「主文」の前置き表現 『インドネシア語メールの「主文」の結果』一覧 『日本語メールの「主文」の前置き表現の結果』一覧
第四章	インドネシア語・日本語ビジネス電子メールにおける「末文」の締め括り表現 『イ・日メールの「末文」の締め括り表現の結果』一覧
終章	結語
参考文献	一覧
資料	インドネシア語・日本語ビジネス電子メールのデータ一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文のメールデータは、2009年から2014年にかけて発信されたもので、インドネシアのジャワ島における日系企業で仕事をする人達のメールである。協力者はインドネシア人8名。インドネシア人が書いたインドネシア語によるビジネスメール300通と日本人が書いた日本語によるビジネスメール300通、合わせて600通のパソコンメールである。ただし、300通のインドネシア語のメールの内、4通（メール番号71・72・73・266）のメールはインドネシア人が日本人にインドネシア語で送っ

たもの、1通（メール番号300）は日本人がインドネシア人にインドネシア語で送ったものである。本論文は、中でも特に「敬称」「前文」「主文」「末文」の考察を中心にしている。

日本語の「敬称」では「～様／～さま／～殿」の使い方について、インドネシア語の「敬称」では「～Bapak（目上の男性へ）／～Ibu（目上の女性へ）／～Mbak（若い女性へ）／～Mas（若い男性へ）」の使い方について分析した。「前文」については、日本語とインドネシア語の「前文」の使用率と出だし表現の種類について明らかにした。「主文」については「オサシツカエナケレバ」「タイヘン（デショウガ）」「カッテ（デスガ）」という前置き表現の意味と用法を明確にした。「末文」は「よろしく願います。」の類のような締めくくりの表現について検証した。全体を通し、メールの構造を観察すると共に、各部分での表現の機能と特徴を明らかにすることを試みた。以下、各章ごとの内容を記す。

序章においては、まず、本研究の目的を示した。次に、ビジネス日本語についての予備調査の結果を報告した。国立スラバヤ大学（Unesa）の日本語学科には学生が300人以上在籍しているが、そのうちの学生154人に質問したところ、「日本語のビジネス文章の書き方」を希望する者が109名いた。本論文の考察は、このような学生達への教育面へも資するものである。

第一章においては、インドネシア語と日本語の電子メール「敬称」の使用状況と「宛名における敬称」と「本文における敬称」との比較検討を行った。インドネシア語と日本語のビジネス電子メールによる「敬称」を考察した結果、以下のような数値が得られた。インドネシア語のメールの「敬称」の使用状況は300通のうち196通あり、65%だった。日本語のメールでは204通あり、68%であった。

インドネシア語のメールの「敬称」で頻繁に見られた表現は9カテゴリーに分けられた。それらは、①「Bapak/Pak（名前）」、②「All Manager」、③「Ibu/Bu（名前）」、④「Bapak/Ibu/Saudara/Saudari」、⑤「Mbak（名前）」、⑥

「Mas/Mbak」, ⑦「Mr./Ms. (名前)」, ⑧「Mas (名前)」, ⑨「Bos (名前)」である。

日本語のメールでは7カテゴリーがあった。①「～殿」, ②「～様」, ③「～さん」, ④「～各位」, ⑤「～社長, ～部長, ～次長」, ⑥「～San/Mr.」, ⑦「～さま」である。

インドネシア語のメールで一番多かった「敬称」の表現は「Bapak/Pak (名前)」(67通)、日本語のメールでは「～殿」(105通)であった。インドネシア語のメールには、日本語のメールに見られなかった「Mas (名前)」「Mbak (名前)」と「Mas/Mbak (名前)」が見られた。その「Mas」と「Mbak」の機能は、日本語の接尾語「～ちゃん」と同様である。

インドネシア語では、初対面の人や下位者に対して、「Mas (名前)」を使うことが見られる。例えば、インドネシアの会社の人事部は、内定や合格を知らせるとき、「Bapak/Pak (名前)」を使わずに、「Mas (名前)」を用いる。「Mas」単独のメールも5通あった。このような現象は日本語のメールでは見られない。一方、本調査では、日本語メールにおいて、親しい人に対して「～ちゃん」はなかった。親しい間柄でも、少なくとも「～さん」「～san/Mr.～」である。日本語では「～さん」「～san/Mr.～」を使う「敬称」は合わせて21通があった。

日本語・インドネシア語の「敬称」の用法の相違点は、次の三点にまとめられる。第一に、「敬称」の使用は日本語よりインドネシア語の方が多く、第二に、相手により「敬称」表現を変える特徴はインドネシア語のメールの方にはっきり見えること、第三に、「敬称」の使用においては、インドネシア語より日本語の方が上下関係が明確なことである。「敬称」という観点からみると、インドネシア語では、部下に対しては呼び捨てをしたり、「Mas/Mbak」を使用することが多く見られた。親近感がある人に対しては、フォーマルな「敬称」(Bapak/Ibu)を使うより、くだけた「敬称」(Mas/Mbak)の方が好まれている。インドネシア人が親しい「敬称」を使用したり、呼び捨てをするのは、受け手を軽く見ているのではなく、親近感を示したいからである。

日本語の場合は、上下関係が明確に反映し、いくら親しくても、相手をそれなりに待遇するから、メールでは、「～ちゃん」は書けない。また、本当に親しいグループのメンバーだと、「宛名」の「敬称」で「さん」を用いることはあるが、受け手を尊重するため、頻りにメールのやり取りをしていますが、「様」に固定化される傾向が一般に見られる。仕事仲間には「敬称」の使い方が崩れる場合もある。「宛名」の「敬称」は「殿/様」を使うが、「本文」では「さん」を用いるケースもある。しかし、

逆パターン、「宛名」は「さん」で「本文」では「殿/様」は1例もない。

インドネシア語・日本語の「宛名」と「本文」での「敬称」使用バリエーションの比較を述べる。インドネシア語の場合、一番多いパターンは「宛名」(Bapak)→「本文」(Pak)である。また「宛名」(Bapak)→「本文」(Bapak)のパターンは、特に目上に対して使い、本調査では2番目に多い。日本語の場合は「宛名」は「殿」,「本文」でも「殿」が最多である。この点に関し、村上英紀(2012)が、宛名の「殿」は最近あまり使われず、「～様」に統一される傾向にあると述べているのは、本調査の結果と合っていない。

第二章では、「前文」の出だし表現を分析した。様々な挨拶表現の使用実態を報告し、中でも単独使用と複合使用に注目した。本章では、様々な挨拶の関わりが明らかにされ、以下のような結果が得られた。インドネシア語のメールの「前文」で頻繁に見られた出だし表現は6カテゴリーに分けられた。それらは、「一般的な挨拶」「感謝」「宗教的な挨拶」「インドネシア語の敬辞」「英語の敬辞」「複合パターン」である。日本語メールでは5カテゴリーがあった。「名乗り」「一般的な挨拶」「感謝」「労い」「複合パターン」である。

インドネシア語のメールで一番多かった出だし表現は「インドネシア語敬辞」(56通)、日本語のメールでは「労い」(36通)であった。インドネシア語のメールには、日本語のメールに見られなかった「宗教的な挨拶」と「インドネシア語・英語の敬辞」が見られた。相手により挨拶表現を変える傾向は、インドネシア語のメールの方が明瞭である。日本語のメールは上下関係にかかわらず丁寧な挨拶をするのに対し、インドネシア語のメールでは日本語式の表現は見られない。インドネシア語のメールは、目上に対しても、「Dear (人名) (敬称なし)」で、敬辞しか言わなかった例もある。さらに、ビジネス場面でも、親疎を問わず、一般的な挨拶の変わりに、宗教的な挨拶「Assalamualaikum (アッサラームアライクム)の祈願で(無事と幸せになりますように)の類い」を使う場合もある。本来、Assalamualaikumはアラビア語で、イスラム教徒ではない人達は、インドネシア語で宗教的な挨拶を表す時には「Salam sejahtera (サラムスジャトゥラ)」を使う。「Salam」は挨拶で、「Sejahtera」は幸せという意味を持っている。また、挨拶を言わずに、「dh = Dengan Hormat (ドゥガン・ホルマツ)」「Dengan」は関係代名詞 dengan, 「Hormat」は「尊敬」という意味で、(敬意を込めての)インドネシア語の敬辞の省略)だけのメ

ールの出だし表現も見られた。

「Assalamualaikum」は用法の幅が広く、改まった挨拶に使用できるし、くだけた場面でも使える。基本的には、宗教の挨拶なので、イスラム無信仰の人達には、この挨拶をしても、反応がない恐れが高い。その代わりに、このような聞き手に一般的な挨拶をするのは妥当である。例えば、「Selamat Pagi」(おはようございます)、「Selamat Siang」(こんにちは)、「Selamat Malam」(こんばんは)である。あるいは、意味的には類似している表現で、「Salam sejahtera」を言うのは妥当である。

なお、本章では複合パターンの傾向を報告できた点が重要である。詳細は論文本文を見られたいが、ここでの知見は、直接、日本語教育に役立つものである。

第三章においては、「主文」の前置き表現が分析される。日本語のメールは300通のうち、「主文」に前置き表現のあるメールは73通あり、表現の類型としては8カテゴリーがある。それらは、①「お差し支えなければ」1通、②「大変(でしょうか)」2通、③「勝手(ですが)」2通、④「よければ」2通、⑤「恐縮ですが」5通、⑥「お手数ですが」8通、⑦「申しわけありませんが類」13通、⑧「可能形類」40通である。この中から、「オサツカエナケレバ」「タイヘン(デショウガ)」「カッテ(デスガ)」の意味用法を分析した。ただ、メールデータだけでは用例数が少ないので、補足データとしてBCCWJ(日本語話しことば均衡コーパス)を使った。

分析結果を述べる。

①「差支えなければ」の用法。メールでは「サツカエナケレバ」に前接する表現はないが、後の表現はおおむね「依頼表現」である。典型的な表現は「お〜ください」である。BCCWJの場合は「サツカエナケレバ」の前には様々な表現や意味項目が前接し、後の表現は「依頼表現」が一番多かった。典型的な後続表現は「〜いただけますか」「〜てください」「〜ていただけないでしょうか」「〜てもらえると嬉しいです」「〜てほしいです」である。

②「大変(でしょうか)」の用法。メールの場合、「大変(でしょうか)」の前接表現は「一人で」のみである。後接表現はほとんど「激励」と「依頼表現」である。この際の典型的な表現は「〜てください」である。BCCWJの場合、「大変(でしょうか)」の前は、メールの受け取り手に心理的コストを与える様々な項目が来る。後接表現は「報告」と「激励」が一番多かった。典型的な表現は「〜はありますよ」「〜は大変だと思います」「〜てください」である。

③「勝手(ですが)」の用法。メールの場合は「勝手(ですが)」の前接表現は、「誠に」しかなかった。後接表現はおおむね「依頼表現」である。典型的な表現は「〜ていただけましたら幸いです」「〜ください」である。BCCWJの場合は「勝手(ですが)」の前の表現は書き手に属する様々な意味項目ならびに表現であった。後接表現はおおむね「報告」と「依頼表現」であった。典型的な表現としては「〜と思っています」「〜がいっぱいありますよ」「〜は失礼なことです」「〜で欲しいと思っています」「〜宜しくですよ」「〜お〜させていただきます」「〜ないように」「〜をお願いします」「〜よろしくお願ひ致します」「〜よろしくお願ひ申し上げます」などである。

第四章では、「末文」における締めくくり表現を分析した。インドネシア語メールで、締め括り表現である「末文」を持つメールは235通、全体の78%であった。インドネシア語メールの「末文」で頻繁に見られた締め括り表現は7カテゴリーに分けられた。それらは、「感謝」「一般的な挨拶」「宗教的な挨拶」「末尾の形式」「敬辞」「依頼」「複合パターン」である。複合パターンは17種類があり、一番多かったパターンは「感謝→一般的な挨拶」である。

日本語メールでは、「末文」のあるメールは90通、30%であった。日本語メールでは、表現は6カテゴリーあった。それらは、「末尾の形式」「一般的な挨拶」「依頼」「感謝」「謝罪」「複合パターン」である。複合パターンの種類は3種類あり、一番多かったパターンは「末尾→一般的な挨拶」である。

インドネシア語メールで多く使う締め括り表現は「感謝」(84通)、日本語メールでは「末尾の形式」(37通)である。インドネシア語のメールには、日本語メールに見られなかった表現「敬辞」と「宗教的な挨拶」がある。逆に、日本語メールには、インドネシア語のメールに見られなかった「謝罪」表現があった。

日本語のメールには「末文」が3割しか見られないが、これは「末文」そのものが不要なのではなく、親しい間柄に対しては、締め括りの挨拶を書かなくてもおかしくないからだと思われる。

また、「末文」だけではなく、「前文」がない理由として、初めてのメールではない場合や、同じ相手に何度もメールをやり取りしている場合があると考えられる。また、人間関係が近いと、挨拶を省く場合もある。さらに、送信者と受信者とが、メールの内容をお互いに分かっている場合は、「前文」なしで、直接「主文」に入ること

も珍しくない。

終章においては、四章まで明らかにした諸点を要約した上で、インドネシア語のメールと日本語のメールとの比較の総括を行った。

本論文では主として計量的なデータから表現分析を中心に論を進めたが、送信者・受信者の関係性を踏まえた、質的な研究が今後の課題である。また本論文で得られた知見を、実際の日本語教育の現場で、今後どのように活かすか考えることも、今後の重要な課題である。